

第 180 話<土呂久に集まれ>の要約と参考資料

第 180 話<土呂久に集まれ>の要約

元鉱夫の盛実弘行夫妻が鉱山跡地に植樹した約 100 本のサクラが春は花見の名所に。土呂久住民、宮崎市民、宮崎国際大学生らが昨年 11 月、盛実さんを応援して植樹地の草を刈って整備し「憩いの広場」造りが始まりました。公害患者支援の時代に代わる新たな交流です。

第 180 話<土呂久に集まれ>の参考資料

180-1 盛実弘行、ケサ子さんによる土呂久鉱山跡地サクラ植樹

朝日新聞 2012 年 12 月 31 日（執筆・坂本進記者）

「鉱害の地 花咲か山に / 老夫婦 苗木植え 25 年」

宮崎県高千穂町の土呂久鉱山跡地。住民らを苦しめたヒ素公害で地区の草木も枯れ果てた。この土地で地元の老夫婦が木や花を植え続けて 25 年。春には花々が咲き、人々が集う場所に生まれ変わった。

（略）土呂久に住む盛実弘行さん（80）と妻のケサ子さん（81）は「昔は煙がすごうての」と話す。地区では鉱石を焼いて亜ヒ酸（ヒ素）をつくっていた。窯からはき出される灰色の煙は集落を覆い、草木も枯らした。シイタケはできなくなり、ミツバチもいなくなった。ぜんそくや肺がんになる住民もいた。

土呂久で生まれた弘行さんは 18 歳の時、祖父、父と同じように鉱山に就職。採掘やヒ素の運搬をした。ケサ子さんも鉱石を選別する仕事に携わった。弘行さんは言う。「亜ヒ酸は真っ白で、きれいじゃったよ。まさかあれが毒とはな」。2 人は皮膚が変色するなどした。県による検診で、1976 年に慢性ヒ素中毒症と認定された。

鉱山には数百人が働き、集落には社宅の長屋が並んだ。映画館やテニスコートもできた。弘行さんによると、閉山の数年前、坑道に水が出て採掘が難しくなり、だんだんと人が去っていった。だが、弘行さんは閉山後も土呂久に残り、鹿児島県の鉱山などに稼ぎに行き、家族を養った。

2 人が木を植え始めたのは、62 年の閉山から 25 年が過ぎた 87 年。花が好きなケサ子さんが言い出した。鉱山会社に許可をもらい、荒れていた焼き窯や社宅の跡地を整備。茂った竹を平日にケサ子さんが切り倒し、週末には稼ぎから先から戻った弘行さんと一緒にサクラの苗木を植えた。苗木の種類は増え、これまでに植えたのは、ヤマモモ、ケヤキ、カエデ、ボケなど 30 種類を超える。鉱山会社の土地を町が無償で譲り受けたいまでは、何本植えたのか、夫婦にも分からない。

「自分の子どもと思っただけ。大変じゃけど、きれいな花をつけてくれると、楽しいな」

と弘行さん。

いま集落に住む 40 世帯の住人の約 4 割が 65 歳以上。過疎化が進むなか、2 人の楽しみは集落の人との花見や県外にいる子ども、孫、ひ孫が集まったの花見だ。「昔は花見もできなかったき、みんなと花見ができるのがうれしゅうての」。ケサ子さんは笑顔で話す。

小雪舞う、年の暮れ。ソメイヨシノの枝先には小さなつぼみがついていた。まるで春を待つかのように。

宮崎日日新聞 2021 年 10 月 23 日

「土呂久は今② 鉾山跡 にぎやかに」

「人が少なくなるばっかりの集落がにぎやかになるように」。盛実弘行さん（89）は 30 年ほど前から、自宅近くの土呂久鉾山跡に桜やツツジを 100 本以上植え、草刈りなど毎日のように手入れを続ける。電動カートで急な坂を上り下り、ミツバチの巣箱も見回る。

盛実さんは 20 代のころ、土呂久鉾山で働いていた。「ここに社宅があって、事務所があって、風呂場があって……。映画館もあったんだよ」。閉山後に荒れ果てていく鉾山跡に寂しさを覚え、花木を植えようと思い立った。5 年前に妻ケサ子さんが亡くなるまでは、木の手入れは夫婦の楽しみだった。「2 人で弁当を食べお茶を飲んで楽しい時間だった。最初、妻には世話が大変だと反対されたけどね」

盛実さんも、鉾害で父や弟を肺がんなどで亡くし、坑内の事故で失った友人もいる。鉾山はいい思い出ばかりではない。だが、盛実さんにとってはつらい過去も含め、土呂久は大切な思い出の場所ばかり。「人生は短い。毎日毎日を大切に生きて、木の世話を続けたい。100 歳を目指すよ」

高千穂町企画調整課「土呂久鉾山鉾害調査覚書」P147 より

第 4 次 昭和 49 年 10 月 1 日認定 25 名 50 年 5 月 1 日（25 名）斡旋解決 6920 万円

盛実ケサ子 昭和 6 年 6 月 12 日生

盛実弘行 昭和 7 年 3 月 18 日生

180-2 上野中学校の生徒のサクラ植樹

高千穂町立上野中学のサクラ植樹計画

日時：2022 年 3 月 11 日（金）午後 2 時～

実際は、3 月 24 日に変更した。学校にコロナ感染者がでたため。

場所：高千穂町岩戸土呂久鉾山跡地

* 盛実弘行さんがすでにサクラ、ツツジなど 100 本以上を植樹

今回の追加植樹は、盛実さんの了解を得ている。

盛実さんが当日参加するかどうかはわからない。

実際は、盛実さん不参加。

土呂久公民館から佐藤元生館長、佐藤和明、佐藤孝輔さんの3人参加。

高千穂町立上野中学校

指導教師：吉田智

参加：全校生 29 人

実際の参加者は 25 人（3 年生は卒業式後だった。卒業生 4 人が不参加）

サクラの苗木 6 本

実際は 4 本。

参考：上野中学校の土呂久学習

2021 年 7 月 6 日 現地学習（参加：3 年生 13 人）

2021 年 12 月 2 日 オンライン発表会（会場：高千穂高校）

2022 年 3 月 25 日 NHK ニュース

「高千穂町の土呂久鉾山跡地に地元の中学生在が桜の植樹」

高千穂町の土呂久地区の鉾山跡地を桜で彩りたいと、地元の中学生たちの提案で桜の植樹が行われました。24 日に旧・土呂久鉾山で桜の植樹を行ったのは、高千穂町の上野中学校の 1、2 年生とこの春、卒業した生徒あわせて 25 人です。

旧・土呂久鉾山では、昭和 37 年まで製造していた亜ヒ酸に含まれるヒ素の影響による公害で、かつては草木も生えないと言われていましたが、35 年前から元鉾夫の男性が桜や桃の木およそ 100 本を植えてきました。生徒たちも地区の人たちのアドバイスを受けながら、高さ 1 メートルほどの桜の苗木 4 本を植え、シカに新芽が食べられないようにプラスチック製のカバーで保護していました。今回の植樹は、卒業生が去年、社会の授業で地区を訪れた際、深刻な過疎化の現状を知り、桜の名所にして多くの人に訪れてもらおうと、生徒たちが提案したということです。

卒業生の甲斐雪音さんは、「土呂久が華やかになってほしいという思いで植えました。私たちが大人になるころ花が咲くので見に来たいです」と話していました。

子どもたちと植樹をした地区の佐藤元生さん（66）は「子供たちが大きくなってまた桜を見に来てくれると信じています。多くの人に今の美しい土呂久を知ってほしいです」と話していました。

2022 年 3 月 25 日 UMK ニュース

「上野中が土呂久にサクラ植樹」

高千穂町土呂久の旧土呂久鉾山跡地では、亜ヒ酸製造による煙害で人や動植物への被害が公害問題となった過去があります。その跡地、中学生在が桜の苗木を植えました。植樹を行ったのは高千穂町の上野中学校の全校生徒 25 人です。現地を訪れた生徒は鉾山跡地周辺に桜の苗木 4 本を全員で植えて、数年後にきれいな花を咲かせるように願いを込め

ていました。

「(授業で) 私の住む地域に近い所で、昔あったの事や現状を授業を通じて学ぶことで、また多くの人たちが土呂久に集まってほしいという気持ちが強くなりました。桜は大きく育って、沢山の人来てもらって楽しんでもらったらいいと思いました」 (参加した3年生)

この取り組みは社会科の「土呂久公害」の授業の中で環境を守る取り組みとして、桜などの植樹を続け、管理している地元の盛実弘行さんの活動を学んだことがきっかけとなっています。上野中学校では、今後も桜の管理を続け環境教育に役立てることにしています。

180-3 宮崎国際大学生の「土呂久に集まれ!プロジェクト」

2022年5月4日の事前調査(川原メモ)

参加者: 坂倉真衣、川越怜奈、八幡領香穂、川原

佐藤和明さん宅に孝輔さん来る。孝輔さんの提案。「鉦山跡地を整備しなければと公民館長と話している。それをいっしょにならないか」。鉦山跡地のサクラ植樹と公園化整備を国際大のチャレンジプロジェクトに申請しようという話になる。宿泊地として、畑中組に、浩美さんの母澄枝さん(工藤久・ツタエの娘)の実家が空き家になっている。ここを使ってもいい。8畳の間2部屋、薪でわかす五右衛門風呂、プロパンガスの台所。(元生さんの話では、大工の久さんがオモテを建てて。あとから風呂と台所を建てました)

和明、孝輔さんと鉦山跡地を見る。「植樹しているサクラ、モモ……が目立つように下刈りをして、社宅跡の階段をみえるようにすると際立つ。入口の方から公民館のメンバーが刈ったのを学生が束ねて捨てる」と、プロジェクトの構想が固まる。

広場(元ゲートボール場)のサツキの花のそばに、電動三輪車の盛実弘行さんがいた。近づいて話をする。「鉦山跡の植樹地の整備はありがたい」

南のツルさん。「私は、鉦山跡地の整備をち、公民館長に言ちよるとよ」

公民館長の元生さんに会って計画を伝える。「ありがたいこと。一緒にやりましょう」

2022年度宮崎国際大学学生チャレンジ・プロジェクト企画書

プロジェクト名 土呂久に集まれ

メンバー 川越 怜奈 (教育学部4年) ほか6名

プロジェクトの概要

宮崎国際大学の学生と地域の方々で、高千穂町土呂久地区の鉦山跡地を将来公園化することを見据えて整備する。さらに整備した鉦山跡地に花や樹木を植樹し、より町を美しく、明るくする。整備する中で土呂久の方々と触れ合い土呂久の魅力を知り、

それを発信する。鉾山跡地の整備は、1泊2日若しくは2泊3日で行い土呂久の方々（土呂久公民館）と協力をしながら進めていく。

プロジェクトの目的・特色

令和3年度に開講化された環境教育論の「土呂久を学ぶフィールドワーク」で高千穂町の土呂久地区を訪れ、過去に鉾山で起きた砒素公害について学んだ。フィールドワークで土呂久に住む地域の方々と接する中で今の土呂久が抱える「過疎化」という問題を知り、宮崎国際大学の学生で少しでも土呂久を明るくしたいと思った。限界集落である土呂久地区を持続可能な町にするためには観光客を増やし土呂久の交流人口を増やすことが求められるが、今回のプロジェクトでは、まず国際大学の学生たちと土呂久地区の方々の交流を目的としこれからもつながりを持てるような基盤を作っていきたい。令和4年5月3日に土呂久を改めて訪問し、地域の方々の話をお聞きする中で、鉾山跡地が荒れていて困っているという意見がでた。砒素公害があった土呂久には現在も様々な公害に関する建物や場所が残っている。鉾山跡地には、かつて土呂久鉾山で働いていた地域の方や近隣の学校が桜を植樹している。しかし、現在は、草が多い茂り、植樹をした桜も草木に埋もれてしまっている。



土呂久の方々は農業などの仕事が忙しいのに加え人手不足が原因で「整備しなくてはと思いつつもずっとできずにいた。」ということだった。実際に鉾山跡地を見に行き、その光景を目の当たりする中でここをきれいにし、みんなの憩いの場になるような公園にできるのではないかと地域の方と話し合った。

実際の活動は稲刈りの終わる10月後半から11月にかけて1泊2日若しくは2泊3日で行い、草刈り等を行い、整備をしていく。また、あらかじめどんな名前の公園にするかを地域の方々と話し合っただけで、公園の看板を木材で作成する。それに加え今回のプロジェクトの記念として植樹をし、これからの成長を楽しめるようにする。

この公園化を見据えた鉾山跡地の整備プロジェクトを地域の方に話したところ、土呂久公民館の方をはじめ、長年植樹をされてきた方々も、「学生と一緒に土呂久を明るくしたい」とみんな喜んでくださった。このような宮崎国際大学生と土呂久の地域の方々との関わりを後輩たちにつないでいくためにも、今回のプロジェクトメンバーは2年生も加わり7人で進めていく。現在の土呂久は35世帯65人で、半数は70歳以上である。「大学生が来るだけで活気が出る」と言って訪問を歓迎して下さる土呂久の方々を今回のプロジェクトでもっと元気にしたい。

構成員が目指す成長

過疎化という問題は高千穂町の土呂久だけでなくたくさんの集落が抱える問題で

ある。これらの問題を自分事として捉え、地域の方々に寄り添いながら一緒に明るい町を作ろうという思いを持つだけでなく、どうしたらよいのか、自分たちにできることは何かを考え、実際に行動に移すことでこれから社会人として働きながらも今回の経験を活かすことができると考える。また、何かを企画するという経験は今までしたことないので、みんなで考えながら1つ1つ挑戦する気持ちで取り組んでいきたい。4年生にとっては最後の大学生活であるためそれぞれ忙しいとは思いますが、自分たちにできることを精一杯やってみたい。そして、国際大学と土呂久のつながりを持続的なものにするためにも後輩たちに自分たちが思う土呂久の魅力を最大限に伝え、これからも継続していききたいと思えるようにしたい。

2022年7月4日 プロジェクトの認証

認証状

川越怜奈ほか10人

あなた方を令和4年度MICチャレンジプロジェクトのメンバーとして認めます。

プロジェクト名 「土呂久に集まれ」

期間 2022年7月4日から2023年1月31日まで

2022年7月4日

宮崎国際大学 学長 村上 昇

2022年9月13日事前打ち合わせ

午前11時半～13時 土呂久公民館で

国際大 川越怜奈ら学生5人、坂倉真衣先生

アジア砒素ネットワーク 西村佳代、川原

公民館 佐藤元生、和明、孝輔

盛実さん宅に寄る

車庫で電動三輪車充電中。盛実さんと呼ぶ（勝手口→玄関）

川越ら学生と話。盛実「1人ずつ鎌を持ってこないかん」

鉾山跡地で。学生が見て回っているところへ盛実さんがくる。喜んで説明してくれる。

鎌で実演してみせる。「家内が喜んでい」と何度も言った。川原に「学生たちを連れてきてくれて」と何度も感謝した。別れるとき、学生たちに「また来てね！」

16時半、高千穂町役場財政課。町側5人（財政課、建設課、税務係、健康センター）

役場は、どんな内容か分からないので、いろんな課が参加したようだ。

川越「11月25～27日に国際大のプロジェクトで、鉾山跡地（町有地）の整備＝草刈りメイン＝をする。来年からは学生がお金を出してつづける。土呂久を盛り上げたい」

町「学生が維持管理を出来るのか」

学生「地域の人たちが自分たちでやる」

町「町立の公園がないので、公園課はない。内容に応じて担当課は異なる」

2022年11月25～27日の「土呂久に集まれ！」実施報告
宮崎国際大学のホームページより



私たち「土呂久に集まれプロジェクト」は、令和4年11月25日～27日にかけて、土呂久鉱山跡地整備を地域の方々で行いました。11月25日は、高千穂町役場を訪問し、財政課の



の方々にこれから整備活動を行うことを伝えました。財政課の方々からは激励のお言葉を頂きました。挨拶を終え、土呂久公民館に行き作業前に外で昼食をとりましたが、曇りつない青空で、気持ちの良いスタートをきることができました。



初日の鉱山整備作業は、地域の方々と学生とで自己紹介から始め、当日整備する範囲を決めました。

また、農具の使い方や安全面に関することを地域の方々に説明していただきました。石垣の上の草をかまで刈ったり、木をのこぎりで切るなどしました。石垣の上は学生中心で作業し、石垣の下は地域の方々が狩払い機を使って整備を行いました。慣れない作業も、地域の方々と会話をしながら楽しんで行うことができ、笑い声が溢れていました。

2日目は、朝から昨日の続きを行いました。2日目の目標は、植樹場所の決定と穴掘りまで行うことでしたので、植樹場所の周りを優先して整備しました。

2日目はバングラデシュの方や県庁の方が参加してください、昨日とはまた違う雰囲気で行うことができました。また、整備後には県庁の方に案内していただき、砒素公害の跡地を見ることもできました。





最終日は植樹と樹の保護柵の作成を行いました。支柱が足りなくなって地域

の方に竹を切っていただいたり、網のかけ方を教えていただいたりと、様々なことを教えていただきました。動物による被害も考慮して、保護ネットは頑丈なものを作ることができました。



また、最終日は多くのメディアの方がいらしており、緊張もありましたが皆で楽しみながら植樹をすることができました。

多くの方々に参加いただき、初めての挑戦を無事終えることができました。学生も地域の方々も外部の方々も全員が充実した3日間であったと感じています。今回で終わりにせず、これからも継続していきたいと考えていま

す。



180-4 テレビ・新聞による報道

宮崎放送ニュース 11/25(金) 19:06 配信

「『ヒ素中毒公害』を乗り越えた高千穂町土呂久地区 大学生が地元住民と共に鉱山跡地の整備に取り組む」

公害を乗り越えた宮崎県高千穂町の土呂久地区の魅力を高めようと、新たなプロジェクトが始動です。

宮崎国際大学の学生たちが地元住民と共に鉱山跡地の整備に取り組んでいます。戦前から戦後にかけて生産された「亜ヒ酸」によってヒ素中毒公害が発生した高千穂町の土呂久地区。坑道から流れ出す水の水質を改善する工事がおとし完了し、鉱山跡地では、住民や町による植樹活動などが行われてきました。

こうした中、土呂久地区について学んだ宮崎国際大学の学生たちが、地区が抱える過疎化などの課題を知ったことをきっかけに、鉱山跡地を整備するプロジェクトを立ち上げました。プロジェクトでは地域住民と交流しながら整備した鉱山跡地に花や樹木を植え、地域の魅力を発信。学生たちはきょう、土呂久地区を訪れ、地元住民らとともに鉱山跡地に生い茂った草を刈ったり木を切ったりしました。

(土呂久公民館・佐藤元生(さとうもとお)館長)「中々いいですね、明るくなりました。花いっぱいとかね、さらに広くとかねなるといいなと思いますけど」
(宮崎国際大学4年・川越怜奈(かわごえれな)さん)「鉱山跡地を土呂久の方々やそのほかの方々、いろんな方々が来れるような憩いの場にできたらなと思っています」

プロジェクトではあさって、桜とカエデの苗木あわせて4本を植樹することになっています

NHK 宮崎ニュース 11月28日

「旧土呂久鉱山跡地を地域の憩いの場に 大学生たちが植樹」

高千穂町の旧・土呂久鉱山の跡地を地域の憩いの場にしようと、宮崎市の大学生のグループが27日、サクラやカエデの植樹を行いました。

旧・土呂久鉱山の跡地で植樹をおこなったのは、宮崎国際大学の教育学部の学生10人です。3日間泊まり込みで地域の人と草刈りをするなど、跡地を整備していて、最終日の27日は鉱山で働く社員の社宅があった広さおよそ30アールの土地にサクラとカエデの苗木6本を植樹しました。学生たちは地域の人のアドバイスを受けながら、ごつごつした石をよけてシャベルで穴を掘り、苗木に土をかぶせていました。

旧・土呂久鉱山では、昭和37年まで製造していた亜ヒ酸に含まれるヒ素による公害で、かつては草木も生えないといわれていましたが、30年以上前から元鉱夫の男性がサクラや桃の木を植えてきました。

学生たちは去年、環境教育のフィールドワークで土呂久地区を訪れた際に過疎化が進む現状を知り、地域を活気づけたいとこのプロジェクトを企画したということで、今後とも後輩たちに引き継いでいくとしています。

4年生の川越怜奈さんは「過疎化を乗り越えたいという地域の人たちの話を聞いて何かサポートできないかと思い企画しました。地域の人や外からくる人たちが集まれる場所にしたい」と話していました。

テレビ宮崎ニュース 2022年11月29日

「土呂久の魅力を発信 宮崎国際大と住民が鉾山跡地の整備プロジェクト 宮崎県高千穂町」

ヒ素公害があった高千穂町土呂久の現在の魅力を発信しようと、宮崎市の大学生が鉾山跡地を整備する「プロジェクト」に取り組みました。

かつてヒ素公害が問題となった土呂久地区ですが、その鉾山跡地には元従業員などが桜の植樹を続け、毎年春になると美しい景色が広がります。こうした土呂久の魅力を発信しようと、25日から3日間、宮崎市にある宮崎国際大学の学生10人が、住民とともに鉾山跡地を整備しました。

(川越怜奈)「ヒ素公害という負の歴史だけでなく、今の土呂久のすばらしさ、そして地域の人たちとの交流を通して、学生と地域で一緒に土呂久を盛り上げることができないかと話し合い、この鉾山跡地の整備プロジェクトがあたりました」

学生と住民と一緒に憩いの広場を作り、サクラなどを植樹することで、過疎化が進む土呂久の交流人口を増やすねらいです。

(佐藤幸利)「きれいなと、みんな(土呂久に)登ってこらすからいいですね」

3日間の作業では、鉾山跡地に生い茂った雑草を刈り取ったあと、サクラとカエデ合わせて6本を植えました。プロジェクトには地元住民も積極的に参加し、学生たちと交流、笑顔の花を咲かせていました。

(佐藤元生)「土呂久が明るくなりますよね。うん、楽しいです」

(佐藤和明)「自分たちもお手伝いできる場所はお手伝いして、憩いの広場的な感じになるといいな、と思っています」

(佐藤怜奈)「学生たちが、そこからつながる人たちにいろんな土呂久の魅力を知ってもらえると思うので、そういう人たちに来てもらいたいと思っています」

学生たちは、この取り組みをSNSでも発信していて、持続可能な地域づくりにつなげたいとしています。

(参加者全員)「土呂久に 集まれ！」

宮崎日日新聞 2022年11月28日

「土呂久鉾山跡 憩いの広場に 宮崎国際大生ら植樹」

かつてヒ素鉾害のあった高千穂町岩戸の土呂久地区で環境学習を続けている宮崎国際大(宮崎市)の学生らが27日までの3日間、土呂久鉾山跡地を訪れ、住民と協同で荒れ地を整備し、苗木を植えた。学生らは「憩いの広場を整備し、より明るく魅力ある地域にしたい」と構想を思い描く。

訪れたのは教育学部の4年生ら10人。1年前から主要坑道「大切坑(おおぎりこう)」の内部見学や農家の牛舎見学などを通し、土呂久の歴史と地域の魅力を学び、住民と交流を深めてきた。鉾山跡に住民が100本以上の桜やツツジを植えて維持管理し

ていることを知った学生が、広場整備の構想を同大学に提案したところ、支援を受けられることになった。

学生は手伝いに駆け付けた住民と一緒にやぶを切り開き、桜2本とカエデ12本を植樹。教育学部4年川越怜奈（れな）さん（21）は「まだ一步目を踏み出したところだが、取り組みを後輩に引き継ぎ、地域内外の人が憩う広場をつくりたい。地域の方とも親しくなれたので、また必ず来る」と話した。作業を手伝った地元の佐藤幸利さん（79）は「過疎の地域に若者が集まり、交流ができてうれしい。春の桜、秋の紅葉が楽しみ」と笑顔を見せた。

読売新聞 2023年1月30日

（略）同大（宮崎国際大）では2020～21年度、県の事業の一環で土呂久公害について学ぶフィールドワークを現地で実施。その参加者を中心に、鉱山跡地に広場をつくるプロジェクトがスタートした。かつて鉱山で働き、35年ほど前から一帯に桜などを植えてきた地元の盛実弘行さん（90）も活動を見守り、「人が集う場所になってほしい」と願う。

土呂久地区では人口減少が急速に進んでいる。町によると、公害が表面化した1971年の人口は269人だったが、今月1日現在で4分の1の64人にまで減少。高齢化率は約6割で、語り部もほとんどが亡くなった。父親が慢性ヒ素中毒となり、亡くなった佐藤慎市さん（70）は、約30年前から学生や海外の研究者を現地に案内している。「土呂久と同様、環境汚染に苦しんでいる地区は今もある。教訓を伝えることが、課題を解決する手助けになれば」と強調する。

こうした中、公害を乗り越えた地区の豊かな自然や住民の温かな人柄をアピールし、にぎわいを生み出そうという声が上がリ、同大のプロジェクトにつながった。参加する学生たちは2月中旬、学内で開かれる発表会で活動や成果を紹介する。広場の完成時期は未定だが、活動中の学生が卒業した後も後輩が引き継ぐ予定だ。

土呂久公民館長の佐藤元生さん（66）は、「地区は公害による負のイメージで差別を受けてきたが、長い時間をかけて払拭されてきた。大学生と一緒に活動するだけでも地域に活気が出る」と歓迎する。公害の被害者支援を中心に結成された宮崎市のNPO法人「アジア砒素ネットワーク」の元理事で、記録作家の川原一之さん（75）は「土呂久には、美しい自然の中に鉱山跡地や公害で亡くなった人の住宅など貴重な遺構がある。歩きながら歴史を学び、住民と交流できる環境を整えば、軽症と値域の盛り上がるの両方につながる」と話している。